

2020.1 no.86



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第3回街に飛び出す作品展

1	2	3	4	5
6		7		8
9	10	11		12

1. 神 まさこ
「Spiral 円」
木・錫・金
w600×h600
2. ノグチミエコ
「1/f ゆらぎ」
ガラス・ランバーコア
w410×h1210
3. 山崎和子
「on TIME」
染織・パネル
w455×h380
4. 山崎和子
「on TIME」
染織・パネル
w455×h380
5. 山崎輝子
「Seeds—風と共に」
皮革
w1180×h1180
6. 片岡雅子
「こだま」
七宝(銅板、七宝絵具)
w930×h1200
7. 白野順子
「オーロラ」
染織・絹
w640×h950
8. 井上勝江
「いやおいの風」
木版画・紙
w750×h750
9. 鈴木法明
「出逢う」
チタン
w1200×h700×d650
10. 神 まさこ
「Spiral」
陶器
w480×h780×d350
11. 野口真理
「空のなか」
陶土・粉漆・金属箔
(玉虫、金他)
w460×h620×d340
w550×h610×d500
12. 堤 一彦
「YUZURIHA」
大理石
w450×h460×d380

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動としてますます広がりを見せて展開しています。

3回を迎える「街に飛び出す作品展」はスターツCAM株式会社とオーナー様のご協力により平成28年10月22日(土)～10月29日(土)建築会館ギャラリー・イベント広場において「第3回街に飛び出す作品展」を会員及び一般から募り、10月24日「街なかミュゼ活動」作品選考会として開催いたしました。

応募申し込み者34名作品35点をaaca推薦選考委員会：厩屋正選考委員長(鹿島彫刻コンクール幹事長・アートプロデューサー)米林雄一選考委員(東京芸術大学名誉教授・彫刻家)山極裕史選考委員(三菱地所設計株式会社・建築家)平山健雄展覧会委員長(ステンドグラス作家)により物件ごとに推薦作品を複数推薦しました。

各作品の前には作者が立ってオーナー様に作品を見ながら作品コンセプトをはじめ素材の特徴や作意などの説明をしていきます。そこでは作品の持つ力と共に、作者のプレゼンテーション力が発揮される場となっています。

作家のプレゼンテーションを交えて、建物オーナー、スターツCAM株式会社、aaca推薦選考委員の三者で検討選考しました。それぞれ美的環境の創造と、各建物の住環境に調和し、また街並みに新鮮なメッセージを投げかける作品12点(10名)が推薦されました。

(実行委員長 安河内敦子)



CONTENTS

■新年を迎えて

新年の挨拶	岡本 賢	4
ジェフリー・バウの建築とアート	福田卓司	5

■令和元年度設立記念会

協会設立記念会（令和元年度）		6
----------------	--	---



▶▶ 6

■第29回 日本建築美術工芸協会賞

AACA 賞・芦原義信賞（新人賞）選考経過		8
AACA 賞		9
芦原義信賞・AACA 優秀賞		10
AACA 奨励賞		12
AACA 奨励賞・美術工芸賞		13



▶▶ 22

■時代の華一輪

アートを通して社会とつながる	中村弘子	14
----------------	------	----

■会員活動レポート

30周年記念事業 記念誌編纂委員会に参加して	本多 陽	16
芦原義信作品撮影後記	吉田 誠	17
原点回帰	櫻井ちるど	18
建造物とアート	大野 彩	19
モザイク巡礼の旅	松本治子	20
ヨーロッパ・テキスタイル研修旅行	五十嵐通代	21



▶▶ 24

■法人会員の企業活動を訪ねて

株式会社 LIXIL を訪ねて	広報委員会	22
-----------------	-------	----

■調査研究委員会だより

地域風土に根差した文化芸術活動分科会報告	七字祐介	24
----------------------	------	----



▶▶ 25

■会員増強委員会だより

第1回 aaca サロンの開催報告	芝山哲也	25
-------------------	------	----

■会員交流委員会だより

金沢・福井・滋賀地区建物視察会に参加して	山下博満	26
----------------------	------	----

■広告のページ

第18回「薨賞」瓦屋根設計コンクール	建報社	27
--------------------	-----	----



▶▶ 26

■事務局だより・広報委員会だより

		28
--	--	----

新年を迎えて

新年の挨拶

一般社団法人 日本建築美術工芸協会
会長

岡本 賢

令和の時代に始めての新年を迎えることになりました。

会員の皆様明けましておめでとうございます。

協会創立30周年に事業が数多く行われ、各々が大盛況の中で終了したことに関係された皆様が達成感に浸っていることと思います。

本当に御苦労様でした。深く感謝申し上げます。

会員の皆様が集まって様々な事業をおこなって協会が継続されていき、歴史を刻んでいく事の重大な意味を深く感じる事が出来ました。

これから令和の時代に又新たな一歩が始まります。昨年はラグビーワールドカップが開催され、今年は東京オリンピックが、そして4年後には大阪万博が開催され日本が世界から注目されるビックイベントが続きます。多くの外国人が日本を訪れて東京、大阪を始め各地の都市に滞在します。彼らに日本の都市景観や生活環境が如何に素晴らしいかを感じてもらわなければなりません。文化的な生活環境、芸術的魅力溢れる都市空間を実現し、普及させる為当協会のような活動が大きな意味を持つてくると思います。

今まで海外に向けての情報発信する事はあまりありませんでしたが、SNS等のツールを使って当協会の活動状況を広く海外に発信し来日する外国人にも協会が行う様々な事業に参加してもらえるような機会を提供することはどうでしょうか？

オリンピックや万博等によって日本がより一層グローバルな存在となっていく事が令和の時代の流れのように思います。

世界情勢は必ずしも平穏な状況ではありませんが、このような時代にこそ芸術文化の力が平和を達成する事の重要性を世界に訴えるべきだと思います。人々が平和に文化的に暮らせる為に当協会の活動が少しでも役に立てるようなaacaになって欲しいと念願しております。

今年も様々な事業が展開されますが会員以外の方々へのアピールをもう少し多くして一般の方々の来場を増やす事を目標にしたいと思います。

昨年末に早稲田大学キャンパスのプロジェクトのシンポジウムが開催されましたが、その機会に早稲田の建築学生へアピールするとか、日本大学でシンポジウムを行う場合は、日大の建築科へのアピールをもっと増やす事が必要ではないでしょうか。

昨年、東京藝術大学で行われた講演会では藝大の学生の参加が見られました。なるべく各地の大学の施設を利用する事も当協会のアピールを広げる一つの方法かも知れません。

今年も会員の皆様が健康でより一層楽しく活躍していただける事を祈念しております。



ジェフリー・バワの建築とアート

建築家
株式会社日本設計
日本建築美術工芸協会理事
福田卓司



アートなしでは考えられないほど建築とアートが一体的な空間という、建築家ジェフリー・バワと彫刻家ラキ・サナナヤキのコラボレーションが思い浮かびます。5年ほど前に機会があってスリランカで見て回りましたが、このツアーはそもそも高級リゾートアマンの原点はバワということから、見に行こうと始まったものでした。バワの作品の多くはホテルで、魅力的なランドスケープ、客室と水回りの関係や空間そのものシンプルさは確かにアマンの原型といえるものでしたが、特に目を引いたものの一つは建築空間の性格を際立たせている彫刻でした。中でもヘリタンス・カナダラマの階段とフクロウの彫刻の関係は、独特の濃密な空気をつくりだしています。

ヘリタンス・カナダラマは世界遺産のシーギリアロック近郊にあるホテルです。深い森に包みこまれており、ホテル自身も緑に覆われ、元々あった岩をそのままホテル内に取り込むなど、周囲の自然と一体化しています。ホテルの特徴として、とてつもなく東西に長い平面形があげられます。長いのですが、廊下はオープンエアでジグザグと曲がり、歩くにつれてシーンが次々と移り変わります。眺望が開ける所にはバワのテイストの家具が置かれており、退屈することはありません。フクロウの階段はこの中心にあります。

モダニズムの建築に抽象的なモダンアートはなじみませんが、ここではフクロウです。でもこれ以外の彫刻は考えられない、神々しいとも言える存在感があります。それはサイトスペシフィックと軽々しく言えないほどです。バワは元々階段がうまい人ですが、下階ではコの字型の回り階段、最上階に向かうところで平面的にずらすという得意の形を使っています。これによって下階では吹き抜けを見上げる形から、最上階に向かって横を回り込みながら見る形へと、彫刻への視点も移り変わります。しかも階段はオープンエアで、最上階では右手にフクロウ、左手に周囲を取り囲む

森を見渡し、外部の自然と建築・彫刻が一体となる演出をしています。



階段吹き抜けとフクロウの彫刻



ジグザグと曲がる廊下

アマンの原型はバワにあるとエラそうに言っている割には、恥ずかしながらアマンに泊まったことがなかったので、昨年5月にバリのアマンダリに滞在してきました。ここにおいても彫刻というか、土地の神を表したものだと思いますが、建築との関係がとても濃密にできていました。

ロビーに面した中庭に、牛なのか獅子なのか分かりませんが、魅力的な彫刻が傘とともに置かれていて、この空間の主としてゲストを迎えます。ホテルはヴィラ形式で客室は分散配置されています。ランドスケープを楽しみながら客室にアプローチするのですが、アイストップの彫刻が道行を豊かなものにししています。

最後に、アマンダリは渓谷に接していますが、朝はここから冷氣（霊気と言った方が正しいのでしょうか？）がホテルまでわき上がってきます。オープンエアのレストランは、床が磨き込まれたフローリングで、ここに縦の手すり子がリズムを刻んで映り込み、軒垂木とシンクロして凛とした美しい空間をつくっています。ここで素晴らしく清らかな空気に包まれてとる朝食は、なかなか他で味わえない心地よいものでした。



ヘリタンス・カナダラマ外観



アマンダリ ロビー中庭



アマンダリ レストラン

令和元年度設立記念会

協会設立記念会（令和元年度）

- 開催日 令和1年12月11日（水曜日）午後5時45～
- 場 所 建築会館大ホール（東京都港区芝5-26-20）
- 来 賓 日本建築学会会長 山脇 出様
日本建築家協会会長 六鹿正治様
- 文化庁派遣帰朝報告
中島達哉（米国シアトル市）
- 出席者 来賓・招待・報道 11名
第28回 AACA 賞受賞者 39名
会員 79名
計 129名

岡本 賢 会長 挨拶



岡本会長

本日は設立記念会に多数御出席頂きまして有難うございます。

御臨席賜りました日本建築学会会長の竹脇様、日本建築家協会会長の六鹿様、御多忙の中、本当に有難うございます。

令和最初の設立記念会となりましたが、当協会は芦原義信先生により平成元年に創立され、平成の時代と共に歩んでまいりまして昨年30周年を迎えました。令和の時代に再び新たな歴史を歩んでまいります。昭和の時代は戦争と敗戦、戦後の復興と高度成長の時代でした。平成の時代はバブル崩壊後の経済不況と幾多の自然災害に見舞われた時代でした。今、令和の時代になって世界情勢は混沌とし、AIやロボットの発達によって社会の隅々迄に大変革が起ころうとする予感が感じられます。今までの概念を大きく変える出来事が起きそうです。そんな不確かな時代の中で人々の感性や自然の中から得られた人間本来の情緒や美的感覚が増々重要になってくるのではないのでしょうか。環境の変化の中でも変らない文化の力が必要になってくると思います。

当協会の活動理念であります 建築とアートの融合による美しい景観、文化的な生活環境の創造が増々重要になってくると思います。

当協会は様々な分野の方が集まって様々な視点から議論を重ねて新しい時代にふさわしい創造的な発信を続けていければと思います。

来年はオリンピック・パラリンピックが開催され、東京を中心に様々なビッグプロジェクトも完成し活力に満ちた年になると思います。当協会の事業も多くの企画が展開され会員の皆様の活躍と御努力に期待致します。

本日は AACA 賞の表彰が行われます。受賞されます皆様には心からお祝い申し上げます。この賞は29回を迎え広く社会で存在感が高くなり年々レベルの高い作品が応募されてきました。昨年から公開審査で厳しい審査が行われました。審査委員長の古谷先生の御苦勞に御礼申し上げます。

今年も残り少なくなりました。来年も皆様にとって一層飛躍の年になります様お祈り申し上げます。本日は有難うございました。

日本建築学会会長

竹脇 出様 ご祝辞



竹脇建築学会会長

みなさんこんばんは。ただいまご紹介いただきました日本建築学会会長の竹脇でございます。本日の日本建築美術工芸協会設立記念会並びに協会賞表彰式の開催にあたり、日本建築学会を代表して心からお祝い申し上げます。またこれまで貴会の活動を支えてこられました歴代の会長、役員、会員の皆様のご努力に対して深く敬意を表します。

貴会は建築家、美術家、工芸家、その他の人々の連携と協力により、建築にかかわる芸術的環境の創造と保存を図るといった目的のもとに、優れた都市景観と文化的な生活環境の創造を目指した幅広い活動を続けておられます。私ども日本建築学会の会員にとりまして最もなじみのある貴会の活動は、建築会館のギャラリーとイベント広場を使って開催される展覧会です。第一線の建築家、美術家、工芸家の作品がジャンルを超えて展示され、期間中に建築会館を訪れる人々に安らぎを与えていただいております。建築会館ギャラリーとイベント広場は原則として建築文化向上を目的とした展示・催しものに対して貸し出しを行っており、貴会の展覧会はまことに目的にかなった使い方であると感謝しております。来年オリンピック・パラリンピックは東京で開催され、2025年には大阪で万国博覧会が開催されます。私たちを取り巻く環境は大きく変化しており、多くの課題を抱えております。それらの課題を解決するには専門の垣根を超えて考える必要があります。優れた都市景観を目指した活動を続けておられる貴会との連携と交流によって、ともに建築の持続的発展に貢献できることを目指しております。

最後に貴会が今後ますますご発展されることをお祈り申し上げます。本日は誠に有難うございました。

日本建築家協会会長 六鹿正治様 御祝辞



六鹿 建築家協会会長

みなさんこんばんは。日本建築家協会の六鹿でございます。31年目のお誕生日おめでとうございます。バースデーとかアニヴァーサリーとかわかりませんが、私の所属している日本建築家協会は、この日本建築美術工芸協会ができた7年前に再編されて日本建築家協会になりました。歴史は133年さかのぼって、いま竹脇先生が会長をやっておられる日本建築学会、それとルーツはおなじでございまして、造家学会まさに家を作る。これが133年前に日本にできて、そこから枝分かれして日本建築家協会になったわけです。7年前に日本建築家協会という形で再編されてということで、ある種ちょっとお兄さん風吹かせたところもあるのですが、30年とか31年前というのは、建築と美術と工芸の関係というのはたぶん非常に、物としての建築、物としての美術、物としての工芸という、すごく物理的存在の関係がたぶんすごく問われていた時代です。しかし、去年の30周年記念誌にもちょっと書かせていただきましたけれど、さきほど会長からお話ありましたけれどもAIとロボットの時代となってくるということで、建築の実務の在り方もすごく変わってきておまして、これからますます変わっていく。たぶんそういう中で、美術とか工芸の在り方も体験とか時間とか記憶とか、そういういったものにかかわるような、物そのものとしてはたぶん捉えにくいものを含まれてくるんじゃないかと思います。そういうなかで、たぶん建築

と美術と工芸の関係も今後大きく変わるであろうというふうに思うのです。ということで、そういう中で様々にそれぞれの団体が手探りでございましょうけれど、新しい時代に向けていろんなことをやっていく必要があると思います。

そういう中でちょっと宣伝したいです。日本建築家協会では今年の10月にSDGs建築ガイド日本版というのをつくりました。(SDGs=Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の略称)SDGsについてはたぶん詳しい方もいらっしゃると思いますけれど、たぶん企業とか自治体が国連の持続可能な開発目標ということで17の目標が掲げられていて、実はその下にさらに169のターゲットが細かく掲げられて、それを2030年までに実現したいということですが、それぞれの分野がそのSDGsにどんなふうにかかわっているのかということが、すごく、たぶんそれぞれの分野に大事なことだとおもいますが。

建築はどういうかたちでSDGsに貢献できるかということを取っ掛かりとして、実例を挙げながら書いたのですが、たぶんaacaにおきましても、たぶんこの時代の流れの中で来年度か再来年度かにはそういうことに、たぶん議論の対象になってくるだろうと思います。

いま建築学会の竹脇先生に伺いますけれど、建築学会は来年STGsの委員会を立ち上げられる。たぶん日本中のありとあらゆる分野でそれぞれの分野がSTGsにどうやってかかわっていくかということ、かなり大きなテーマとなる。そういう中でぜひaacaと日本建築家協会、歩を一にしてしっかりと持続可能な開発目標のために様々なことをやっていきたいです。今後ともどうぞよろしくお付き合いください。今日ほんとうにおめでとうございます。



会場風景

第 29 回 日本建築美術工芸協会賞

古谷誠章選考委員長 選考経過

昨年の公開審査に引き続き、今回も二次審査を応募者のプレゼンテーションによる公開審査として行い、発表された方々を始め、選考に当たられた審査員各位、進行を支えてくれた事務局各位のおかげで、無事に終了することができました。まずは皆様に感謝いたします。

今年また格段に応募作品の質が向上し、現地審査対象作品、並びに最終選考には大いに苦しみました。作品の内容も大規模な大学図書館や講堂や大小の商業施設から、オフィス、個性的な住宅、既存建物の大胆な改修など、実にバラエティに富んだものでした。また AACA 賞ならではの美術工芸と建築の融合の視点からは、両者が独立してあるというよりは、その境界が曖昧になり、建築にアートが自然に溶け込んだもの、または建物の一部が、建築の要素でありながら高度にアート化されたものなど、多様なものが見受けられました。

そんな中で今年圧倒的な説得力を持って AACA 賞を獲得したのが《福祉型障がい児入所施設 まごころ園》。「施設」でありながら「家」を彷彿とさせるブレークダウンされたスケール感と、子どもの生活環境にふさわしい細やかな空間の変化を内包する機知に富んだデザインで、最終審査において審査員全員の支持を得ました。

芦原義信賞には環境性能を重視する独創的なクライアントの要請に、綿密な思考とものづくりへの果敢な挑戦で応えた《淡路島の家》が選ばれました。淡路瓦の技術を活かして、日射遮蔽や通風のための独特の外部シェルターを形づくる弓なりにカーブを描くユニークな「日除け瓦」を実現しています。

これに続く優秀賞の3作品も、それぞれに特徴のあるもので、《早稲田大学 37 号館早稲田アリーナ》は同大学の旧記念会堂を建て替えたもので、大規模なアリーナを地下化して地上をランドスケープで覆うもの、《SYNEGIC Office》は本社屋を CLT による大胆な木構造でつくるもの、《UTSUROI TSUCHIYA ANNEX》は古くからの情緒を保つ城崎温泉で、元の消防署をゲストハウスに改装する斬新な試みで、何れ劣らぬ力作ぞろいでした。

奨励賞3作品は、《日本橋旧テラー堀屋改修》が木造を補強する方杖状の部材を構造用の鋳鉄でつくって独特の雰囲気を出しており、《ACADEMIC-ARK@OTEMON GAKUIN UNIVERSITY》が新キャンパスでの学生の拠点となる図書館を大きな逆三角錐状の形づくり、その外皮をステンレス・ダイキャストで製作した透ける金属スクリーンで覆ったもの、もう一つの《La・La・Grande GINZA》が小ぶりな店舗ながら、動線の集中するその外皮を緻密なサッシュワークで美しく構成しており、3作品のいずれもが建築の一部を美術工芸化したものと言えます。最後に昨年度に創設した美術工芸賞には、《i liv (アイリブ)》が選ばれました。銀座の中央通りに面するその正面全体を、ウェーブするガラスルーバーで造形したもので、そのイルミネーションとあわせて、建築そのものが美術工芸としてのアート作品に結晶しているとして、審査員の多くから指示を得て選ばれました。

毎年のことながら今回もこのように充実した作品を数多く選ぶことができ、大変うれしく思います。



受賞者一同写真

■ 第 29 回日本建築美術工芸協会賞 受賞作品

AACA 賞

「福祉型障がい児入所施設まごころ学園」

作 者：山下秀之 木村博幸 江尻憲泰
所在地：新潟県見附市田井町 4476



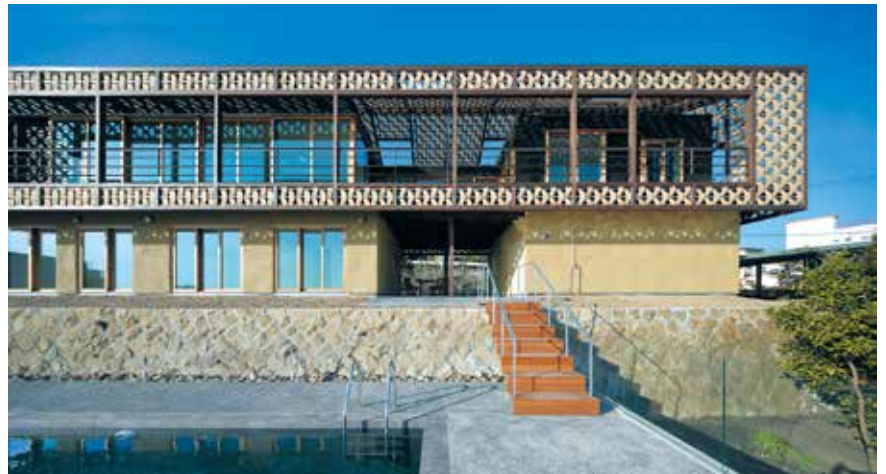
写真版權者 木田勝久



芦原義信賞

「淡路島の住宅」

作 者：末光弘和 末光陽子 田中建藏／SUEP
所在地：兵庫県淡路市岩屋 794-1



写真版權者 中村 絵

AACA 優秀賞

「早稲田大学 37 号館早稲田アリーナ」

作 者：水越 英一郎、篠崎亮平（株式会社山下設計）宮崎俊亮（清水建設株式会社）
吉村純一（プレイスメディア）
所在地：新宿区戸山町 1-24-1



写真版權者 新建築写真部



AACA 優秀賞

「SYNEGIC Office」

作 者：堀越ふみ江 長谷川欣則
所在地：宮城県富谷市成田 1-9-5



写真版權者 SYNEGIC office 平井広行



AACA 優秀賞

「UTSUROI TSUCHIYA ANNEX」

作 者：垣田博之
所在地：兵庫県豊岡市城崎町湯島字湯之元 584-1



撮影者 母倉知樹

AACA 奨励賞

「日本橋旧テーラー堀屋改修」

作者：三井 嶺
所在地：中央区日本橋本町 3-6-5



撮影者 三井 嶺



AACA 奨励賞

「ACADEMIC-ARK@OTEMON GAKUIN UNIVERSITY」

作者：須部恭浩 永山憲二／(株)三菱地所設計
所在地：大阪府茨木市太田東芝町 1-1



写真版權者 三菱地所設計

AACA 奨励賞

「La・La・Grande GINZA」

作 者：大成建設(株)一級建築士事務所
中藤泰昭 今村水紀 高岩 遊
所在地：中央区銀座 6-3-18



撮影 新建築社



美術工芸賞

「i liv (アイリーブ)」

作 者：大谷弘明・上原 徹・大藤淳哉・府中拓也 (楨日建設)
所在地：中央区銀座 5-7-6



写真版權者 Koji Fujii/©Nacasa & Partners Inc.

アートを通して社会とつながる

1980年代、パブリックアートという言葉が広がり始めました。それはちょうど、私がスタンドグラスの制作を始めたころでした。スタンドグラスはその成り立ちから建物への設置を前提としています。一般的には「応用芸術」に分類されるため、いわゆる「芸術作品」とは異なる立場でパブリックアートについて考え、制作をしていました。

1990年を過ぎたころ、バブル経済崩壊後とはいえ、まだまだ建物にスタンドグラスを設置する機会は多く、民間の施設からコミュニティー施設、病院、福祉施設など様々な現場への設置を経験しました。その後、社会の状況変化とともに、コミュニティー施設や福祉施設など、地域の住民が利用する施設の仕事が多くなりました。施主の傾向も変わり、そこを利用する人の顔が見えるようになると、建物にアートを入れるだけで利用者がアートに親しむことにつながるのだろうか、それは受け入れられるのだろうか、ということを深く考えるようになりました。

自分なりに悩みながら制作を続けていたころ、コミュニティーアートという言葉に出会いました。この言葉はイギリスで生まれ、地域に根差したアート活動を意味します。そしてそれは、地域再生や社会的に恵まれない人々の問題など、社会問題の解決に貢献する活動でもあります。日本でも、アートを手段として地域の問題を解決しようとする活動、あるいは市民がアートに親しむための市民参加型の活動として、コミュニティーアートは広がりつつありました。その定義や目的は様々ですが、アーティストが培ってきた技能を社会のために生かし、アートと社会をつなげ、「社

スタンドグラス作家
NPO 法人アート多摩 代表
日本ガラス工芸協会会員
日本建築美術工芸協会会員

中村弘子



会に良いこと」を行うという、パブリックなアート活動です。

2001年、イギリスに滞在して、コミュニティーアートやパブリックアートを実際に見てまわる機会を得ました。そして、広い公的空間に有名な作家の大きな彫刻が設置されているものから、地域再生のシンボル、小さな施設の壁画まで、規模も目的も異なる様々な作品に出会うことができました。

なかでも地域再生、活性化のための環境の整備には興味を引かれました。行政主導の作品設置で終わるのではなく、計画段階から住民、行政、アーティストが協働し、本当に地域社会のためになることを考えて実施されていました。さらに、街の環境整備に終わらず、継続的な生活支援、アートの技術を学ぶ職業訓練まで、住民参加で進められているところもありました。

日本でも当時から、地域の活性化や高齢者、障がい者の抱える問題解決のためにアートを活用したプロジェクトは行われていました。自分もアートの技術を生かして社会の役に立つ活動はできないだろうか。社会問題の解決とは言わないまでも、市民がアートへの関心を高め、「アートを通して社会を見る目」を持ってもらうための活動に取り組んでみたいと思うようになりました。

そのため、まずは身近なところから始めようと、同じような考えを持つ仲間とNPOを立ち上げ、地域の人たちを対象にしたアート活動を始めることにしました。当時、活動エリアだった多摩ニュータウンでは、少子高齢化、人口減少による過疎化に伴う問題がありました。また、障がい者に対する法制度が変わり、障がい者を取り巻く環境が大き



「アート散策マップ」多摩中央公園に設置されたモニュメントをめぐる散策マップ



「姿池バルーン」公園内の池にカラフルなバルーンを浮かべ、清掃作業を楽しいアートイベントに

く変化した時期でもありました。

多摩ニュータウンで最初に行ったのは「アート散策ツアー」でした。40数年前に最先端の都市計画として整備された多摩ニュータウンの公園には、多くのアート作品が設置されています。けれどほとんどの作品は放置されたままの状態、忘れられかけていました。そういう作品を見てまわり、地域の宝を再発見しようという、「アート散策ツアー」を開催しました。また、ニュータウンの西部エリアの公園で、「アース・アート」と称して定期的にアートイベントを行いました。公園内の間伐材などを利用して、来園者と一緒に大きな作品をつくったり、「土器の野焼き」体験のイベントを開催しました。ニュータウンエリアには縄文時代の遺跡が多いので、縄文時代のアートに触れて、地域の歴史を知ってもらおうというわけです。住民ボランティアで行っていた公園内の池の掃除を、アートで少しにぎやかにして、楽しみながら掃除をしてもらうイベントなども行いました。

障がい者関係については、地域の福祉系団体と協力して、障がい者のための創作教室を行ってきました。今日でこそ「アール・ブリュット」として障がい者の作品に注目が集まっていますが、それでもアートに接する機会を持つ人はまだ



公園内の園路に土をふるって
ステンシルで絵を描く



「長池の道」公園を訪れた人たちが園路に思い思いの絵を描く。
土が乾いて風が吹いたら消えていく

まだ少数で、文化的に恵まれているという状況には程遠いものがあります。

これまでの活動で、地域の人たちがアートに親しみを持つようになったかどうかは確かめられませんが、「知ってもらおう」ことはできました。

今日では、コミュニティー施設で市民を対象としたアートプログラムが盛んにおこなわれるようになりました。公園などで企画したアートイベントを遠目に眺めるだけではなく、やりたいことを自分で探して積極的に参加する、という人が増えています。多くの世代でアートが生活の一部として定着しつつあると感じています。

パブリックアートへの思いが、コミュニティーアートという「社会に働きかける活動」へつながりました。近年では、災害からの復興にもアートが活用されています。アートが生活の一部となり、市民の側からパブリックアートを求める声が上がった、という話も耳にするようになりました。市民が「アートを通して社会を見る目」を持ち、市民の側からもアートを通して社会とつながる動きが今後ますます盛んになることを期待しています。



「土器の野焼き体験」縄文時代の土器焼成を再現。多摩市は縄文遺跡が多い地域

30周年記念事業 記念誌編纂委員会に参加して

建築家
30周年記念誌編纂委員会副委員長
日本建築美術工芸協会法人会員
本多 陽

私にとっては、aacaに入会後初めての委員会活動が30周年記念誌編纂委員会です。記念誌の制作を通して協会内外の方々と知り合えたことは私にとってかけがえのないものとなりました。

30周年記念誌は「多くの会員の活動が見えてくる」をコンセプトとし、周年と重なり迎えた「芦原義信生誕100年」記念、そして「aaca30年の総括」を加えた構成となりました。

「多くの会員の活動が見えてくる」では、全委員会の活動と会長、全理事・監事の寄稿を写真等のビジュアルを数多く用いて表現しています。例えば表彰委員会 可児委員長の「aacaとAACA賞・芦原義信賞」は、AACA賞・芦原義信賞の歴史、趣旨等について、前身となるデザインコンペまで遡って執筆いただきました。調査研究委員会の南委員長の「パブリックプレイスとアート30年の考察」は、委員会活動というよりはパブリックアートに関する論文です。

「芦原義信生誕100年」の記念では、改めてまとめた芦原先生の経歴、作品を、芦原太郎氏と初子夫人のインタビュー記事とともに掲載しています。芦原邸にお邪魔し行われたインタビューでは、和やかな雰囲気の中、建築、都市、建築とアートの話はもちろんですが、プライベートのお話を伺えたこと、今でも庭に残るお先生お気に入りの野天風呂などを拝見できたことも貴重な体験となりました。



芦原初子さん



芦原太郎氏



芦原邸露天風呂

記念誌では記録としてだけでなく、読み物としても楽しめるよう3つの鼎談を実現しました。宮田文化庁長官、岡本賢会長、松本哲夫元理事に登壇いただいた「文化的な都市環境の創造にむけて」は、文化庁内の長官室で行われました。宮田文化庁長



鼎談風景



官の切れ味鋭い指摘や、建築はアートそのものではないという言葉が印象的でした。

宇津野名誉副会長、石田理事、立石フォーラム委員会委員長に登壇いただいた「aacaの歴史を振り返って」では、aaca設立当初の貴重なお話や、このような団体を運営し、それを続けていくことがいかに大変かということを教わりました。

多くの都市計画事業を手掛けられた本理事、そして多くのパブリックアートを手掛けられた米林理事、アートの制作とともに若手アーティストの育成に尽力されている中村理事にご登壇いただいた「パブリックアートの現状と展望」では、それぞれの立場でパブリックアートとの関りについて語っていただき、日本特有のパブリックアートが直面する課題のほか、日本で若手アーティストがパブリックアートに関わっていける仕組み、パブリックアートが社会に根付くための仕組みをつくることの重要性、難しさについて知らされました。



宇津野名誉副会長



石田理事



立石フォーラム委員会
委員長

周年記念誌というものは、これまでの活動記録を残すことも重要な役割です。「aacaの30年の総括」では、資料編として冊子後半の53ページを割いて30年に亘る活動記録を残しました。1989年10月の創刊号から79号に至る会報記録、歴代理事・監事・名誉会員リストのほか、委員会の開催記録、AACA賞・芦原義信賞の受賞作品記録など、こちらはビジュアルのない文字のみ構成です。制作当初は、資料編は十数ページの構成で考えていましたが甘い考えでした。これだけサラッと見ても会員の皆さんの協会への熱意を感じることができます。

最後に、aacaでの経験が浅く協会についてよく理解していない者が編纂委員長など務まるのかと思っておりましたが、スケジュールのコントロールもままならない中で、それでも発刊にこぎつけることができたのは、ひとえに編纂委員会の皆様はもとより、協会の皆様に協力いただけたおかげです。また、紙面の制作においては日刊建設通信新聞社の外野さんに大変お世話になりました。改めまして皆様にお礼申し上げます。

芦原義信作品撮影後記

建築写真家
日本建築美術工芸協会会員

吉田 誠



15年程前に北海道帯広「六花の森」取材撮影で広報委員会飯田委員長と初めてお会いしました。そのご縁もあり会報誌のお手伝いをさせて頂く事になりました。一昨年の生誕100周年の特別企画として駒沢公園体育館・管制塔、武蔵野美術大学キャンパス、北澤美術館の3作品の取材撮影を担当させて頂く機会に恵まれました。

2018年5月30日PM(雨)

今企画の第1回目撮影は駒沢公園体育館・管制塔・広場でした。この日は生憎の小雨また平日と言う事もあり現場は閑散とした感じでした。お昼過ぎに飯田委員長と原稿を担当される三上編集委員と大きなトップライトがあるエントランスホールで待ち合わせました。ホールは彩度の低い赤い扉、青と緑の床パターンに昭和を感じました。赤い扉から体育館内部に入るとシェル構造の屋根に柔らかく包み込まれるよう空間でした。客席もエントランスの床パターンと同じく南側に青椅子、北側に緑椅子と明快にゾーンが分かれていました。最近のアリーナ撮影では照明の入れ方に苦労しますがこの現場はあまり苦労もなく全体に光がまわっている印象でした。設備のダクトも空間に調和していました。「飯田さん、そこにある消火器をどかしてください」と体育館内部で声を出しながら約1時間体育館を3人で贅沢に専有しながら取材撮影をさせて頂きました。外観は後日再チャレンジ。

2018年6月2日AM(曇り後晴れ)

内部撮影から3日後外観撮影。現場到着して空を見上げると曇り空。とりあえず外観全景の撮影ポイントまで移動してみるとやはり曇り7:青空3でした。白いシェル屋根体育館と白い梁と柱の管制塔にはもう少し青空が欲しく車の中で缶コーヒーを飲みながら待機しました。その後2時間程すると青空7:曇り3に逆転していました。家族連れやランニングなどの利用者も増えていて広場全体で賑わいのある良い感じになりました。今も市民の方々がモダニズム建築を日常的に親しんでいる現場でした。



家族連れなどで賑合う駒沢公園



木漏れ日が差込む武蔵野美術大学アトリエ

2018年7月30日AM(晴れ後曇り)

この日は最高気温34度の猛暑日の予報の中、武蔵野美術大学で撮影でした。キャンパス内は夏休みもあり学生はまばらでした。お昼からは雷雨の予報もありすこしペースを早めながら撮影しました。正面ゲートで手続きをして本館を通り抜けロケハンもそこそこにまず東向きの図書館を撮影。次にキャンパス計画の起点となったアトリエ棟を向かい側のデザイン棟から撮影。その後正面ゲートでは大きな看板を飯田さんと汗だくになりながら退かして撮影、本館ピロティー大階段では学生が少なかったので学生時代を思い出してもらいながら三上さんにモデルになって頂いたり協力頂きながら各施設をお昼前まで撮影しました。アトリエ棟内部も飛び込みで撮影をさせて頂きました。三角のトップライトから木漏れ日のような光が差し込む白いキャンパスのような空間でした。残念ながら作品の著作権などあり掲載は出来ませんでした。残念。帰りの正面ゲートを出る際には空には大きな雲の固まりが出来、今にも雷が聞こえそうでした。

2018年11月13日AM(曇り一時晴れ)

この日は早朝新宿発のスーパーあずさに乗車して上諏訪の北澤美術館で取材撮影でした。新宿からの車中の車窓からは予報通りどんよりと曇り空。甲府を過ぎたあたりから紅葉する山並みの遙か向こうに少しだけ青空が見え、希望が少しだけ出来ました。上諏訪駅で飯田さんと合流しタクシーで現場へ到着すると銀杏の紅葉と青空が出迎えてくれました。初め美術館の方と中2階のカフェでご挨拶をしながらコーヒーを頂きました。カフェからの諏訪湖の眺めは東山魁夷先生もお好きだったとお話を伺いまずそこから撮影を開始しました。その後1階の黒いアールヌーボーの展示室、2階の白い日本画の展示室とコントラストの強い空間構成を撮影しました。諏訪湖に面したライブラリーやカフェは天井が低くおさえられおり住宅の和室のようなスケールで三脚を少し低めに設定して撮影をしました。2時間程度で撮影も無事終了して駅近くの飯田さんお勧めの美味しい蕎麦屋で食事後やはり長野は蕎麦に温泉という事で帰りの待ち時間でホームにある足湯につかりました。3時間程の短い諏訪湖畔の滞在でしたが晴々とした出張撮影でした。



諏訪湖を望む北澤美術館カフェ



上諏訪駅ホームの足湯

原点回帰

株式会社建築画報社
日本建築美術工芸協会会員

櫻井ちるど

建築画報社は2019年で創立55年を迎えることができました。これもひとえに皆様方のご支援ご厚情の賜物と深く感謝しております。

原点を振り返りますと、建築画報社は私の祖母、小堀ミツが55年前に創業し、雑誌『建築画報』の第一号となる創刊号を1965年12月に発行しました。特集テーマは「大阪ロイヤルパークホテル特集」。サイズはA5判と小さく、定価は350円。創刊号の小堀ミツの「創刊のごあいさつ」をここに引用させていただきます。

きびしい寒さの折、みなさまにはますますご繁栄のこととおよろこび申し上げます。さて雑誌編集について長いあいだご指導ご鞭撻頂いて参りましたが、このたび各設計事務所の諸先生のご後援を仰ぎ新しい形の雑誌、建築画報を発刊いたすことになりました。今までの経験を生かし誠意をもって努力してまいりたいと存じます。ここに「大阪ロイヤルホテル特集」を創刊号といたし、内容も建築業界に限らず一般の方でも目でのしめる美しい写真を多く使い、座右に置けるように配慮して新しい建築画報を編んでみました。(中略)ふつつかではございますが、旧に倍し、みなさまのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

祖母が生きた時代に建築業界において女性が起業することの大変さは計り知れません。

1999年より母である櫻井旬子が代表のバトンを受け継ぎ、先代から続く「女性ならではの視点」で建築雑誌に向き合っています。

建築画報の特集テーマは、ある企業そのもの(一社特集)であり、またある時は建物単体を一冊で紹介(モノグラフ特集)します。全く別の観点で、切り口を決めて独自の取材から特集内容をまとめることもあります(自社特集)。不定期ではありますが、年に4、5冊の発行を目指し、これまで380冊を刊行して参りました。

最新号でもある2019年12月号「坂倉建築研究所特集」のように、一社を丸ごと紹介する機会が多いなかで、特集主の企業について理解を深め、その独自性を把握したうえで、どのような客観的視点でその魅力を引き出すかが課題となります。取材したい対象企業に依頼をして、発刊計画や企画内容を一緒に練っていきながら、骨子を固め、約一年かけて特集号の完成まで伴走します。その間、太陽の光を求めて同じ方に向かって咲くひまわりのように、特集主の編集メンバーと同じ方角を向いて編んでいくことで、密

度の濃い雑誌が完成します。

その制作過程は料理に似ています。料理は素材を知ることから始まり、素材そのものの味を引き出すには、どのように調理すれば良いかを検証します。試行錯誤を重ねて、納得する品ができたなら、最後に要になるのが盛り付けです。料理は美味しくあるのはもちろん、目で見てたのしく、美しい必要があります。雑誌制作も同じく、内容を充実させることはもちろんのこと、誌面のデザイン力によって大きく印象は変わります。特集主の目指す誌面イメージを共有し、デザイナーと写真の色味や図面の見せ方を考えていきます。そして、さらには印刷会社とも、そのイメージを共有しながらオーダーを出していきます。

このようにして、出版社である私どもだけでは決して辿り着けない一冊が完成するのです。

活字離れ、紙離れが嘆かれる近年ですが、古くても保存するに値する建築が存在するように、価値ある誌面作りに勤しみ、ビジュアル面からも資料性の高い、アーカイブするに足るものとして書棚に並べて頂けるよう、より一層励んでいきたいと思えます。

この場をお借りいたしまして、55年という長い年月、建築画報社を支えてくださった写真家やデザイナー、印刷会社を始め、毎号ご意見やご感想を寄せてくださる編集顧問の方々、また、これまでとこれからの特集主の皆様、改めてお礼を申し上げます。建築業界の更なる発展の一助となれるよう、社員一同、感謝の気持ちを忘れずに、より一層努力して参ります。



◀ A5判だった創刊号「大阪ロイヤルパークホテル」
様々な「建築画報」の表紙▶
▼これまでに手がけてきた単行本の一部

建造物とアート

フレスコ普及協会代表
壁画 LABO 主宰
日本建築美術工芸協会会員

大野 彩



現在、私達フレスコ普及協会は、人類最古の絵画技法と言われる“フレスコ”を知っていただこうと活動しています。その一つとして、ビエンナーレで“フレスコ展”を開催しています。約60人の画家達が、それぞれのフレスコの世界をもってタブローを発表します。2019年には5回目を迎えました。壁画を制作する画家もいます。

歴史に残る建造物の中にも、建物とアート（絵画・彫刻等）が一体化して世界を作り出しているものが見られます。イタリアの教会建築内部、インドのアジャンタ・エローラ、エジプトの神殿などです。

次に、私が主宰する壁画 LABO の活動を紹介します。栃木県佐野市葛生の行政センターの壁画「ふるさと・葛生 未来への道」です（写真①）。

2016年、栃木県葛生町が佐野市葛生になって約10年、元の庁舎の跡に、葛生行政センターが作られました。建物の入口から、左側が行政センター、右側が図書館です。正面の2階部分の壁に、壁画の為のスペース（高さ約3m×幅約5m）が設けられました。

私達は“みんなで作る”をテーマに“トンネルの向こうに、未来の葛生を見よう”と考えました。

まず、葛生中学校にお話をし、10cm×10cmの小さなレンガに絵や字を描いてもらいました。ズグラフィートというフレスコの技法を使って、引っ搔いて作ります。これを壁画の周囲に額縁のように配置します。

夏の暑い1日、葛生中学校の体育館で、常盤中学校の生徒さんも交えて、左官さん、壁画 LABO のメンバー達と共に制作しました。その他多くの方々に参加していただき、合計146個の額縁風小レンガができました。

また、葛生地区にある石灰メーカー全17社に扱っている消石灰等を分けていただき（写真②③）、それらをブレンドして葛生消石灰を作りました。それは、ひび割れることのない、大変良いものでした。

そして、参加してくれた中学生達には、足場の上で壁画制作を見学してもらいました。

葛生の人達が行政センターに行く時は、住民票を取りに行くといった、ちょっとした用事かもしれませんが、その時に「壁画の周りのレンガは僕が作った」と話してもらえれば世代を超えた思い出になっていくと思います。

最近、「建築費の1%をアートに」という運動も始まっているようですが、1%などと、ケチなことを言わずに、アートと建築が織りなす空間の創造と考えてはどうでしょう。

以前 aaca でフレスコのことをお話しさせていただいた時、建築とフレスコがコラボできるといいですね、と締めくくられました。建築の構想段階から、建築家と aaca の様々なメンバーと一緒に空間作りを考えられたら、素晴らしいと思います。作家、画家達と建築家とで話を膨らませることもできるでしょう。日本建築美術工芸協会の中にそのような場があれば、さらに素晴らしい協会になっていくと思います。



写真①「ふるさと・葛生 未来への道」



写真② 左官用消石灰
(吉澤石灰工業株式会社)



写真③ 特選消石灰
(駒形石灰工業株式会社)

モザイク巡礼の旅

モザイク作家
モザイク会議会員
日本建築美術工芸協会会員
松本治子



私は、1990年頃からモザイク制作を続けてまいりました。そして、2019年開催されました第3回BOX展では入賞させていただきまして、その際に制作しました《矢の先をハート♡にかえて》は、2018年に訪れましたフランスのリヨン郊外にありますガロ・ロマン博物館の古代モザイク遺跡と、その修復過程に感銘を受けて制作いたしました。

2018年10月にAIMC（イタリアのラヴェンナに本部を置く国際モザイク作家協会）の主催でモザイクのシンポジウムがフランスのパレルモニアルで開催され、世界38か国、170名余りのモザイシスト（モザイクを作る人）との交流の機会を得ることができました。この4日間のシンポジウムのテーマは、「現代のモザイク」で各国のパネリストによってフランス語と英語の二か国語で発表されました。フランスの光と影、石の文化に育まれたモザイクは繊細な配色と1ピースの形にいたるまで、すべてが新鮮でモザイクの独特な風合いを勉強できた、学びの多きフランス滞在でした。

私は、外国のモザイクを見てみたいという思いから、2019年6月にはアメリカのシカゴにあるシカゴモザイク学校のワークショップに参加いたしました。レッスンは、朝9時から夕方5時まで英語でのプログラムで、5日間の外国の方々とのモザイク作業を通して世界を感じられるとても貴重な体験となりました。シカゴでは、フランク・ロイド・ライトが手掛けた建築が世界で最も多く残っているオークパークへ出かけ、ライトの代表作とも言われるキャンティレバーの庇が印象的なアーサー・R・ヒュートレー邸やフランク・W・トーマス邸などライトの建物を一日堪能しました。シカゴ市内では超高層建築群やシカゴ美術館や現代美術館も視察しました。また、チェイスタワーのプラザにあるシャガールのモザイク壁画《四季》、シカゴカルチュ

ルセンター内のモザイク装飾は映画などに度々登場していますが、アメリカのモザイクは、ガラスとタイルを使用した具象画が多く、シカゴの古い煉瓦張りの渋い建物にカラフルにリズムカルに共存していました。モザイクのモチーフは、宗教的と言うより、人種的な背景を基盤として、配色は原色が多いように思いました。

シカゴで貴重な体験をした私は帰国後、100本の小枝の作品に取り組みました。小枝100本に石、タイルを貼っていくのですが、枝の曲がり具合はそれぞれ違い、その形に沿ってモザイクを貼ることはとても難しい作業でしたが、石やタイルの一片一片に表情を持たせることができました。石をコツコツと割っていく作業は、現代のスピーディーさが望まれる流れに逆行するような異空間であり、私にとっては、自己を取り戻す貴重な時間でした。この《ミラーとモザイクのコエダ》は、2019年の10月2日から7日まで横浜市民ギャラリーあざみ野で開催された「モザイク展2019」（モザイク会議主催）で多くの海外招待作家の作品と共に展示されました。その後、北青山のオリエント・ギャラリーでも展示していただきました。

私は、モザイクは手の温もりから生まれる表現方法なので、敏感にその国の風土、環境、文化が写し出されると思います。あるフランス人作家が「モザイクを作る人は初めて会って、言葉が思うように伝わらなくても、すぐに仲良くなれる。それは制作において忍耐力を分かち合っているからである。だからモザイシストは小さな家族（small family）である」この言葉はとても感慨深く、モザイクが民族、国境、時代を越えて、長い歴史を持つ創造行為の一因であるように思いました。私はこれからもモザイクの奥深さとモザイクでしかできないことを探して、制作していきたいと思っています。



《矢の先をハート♡にかえて》



シンポジウム「現代のモザイク」



カルチュラルセンター内のモザイク装飾



フランク・W・トーマス邸



シャガール《四季》の一面



《ミラーとモザイクのコエダ》

ヨーロッパ・テキスタイル研修旅行

染織家
新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員
五十嵐通代



2019年は6年に一度、ヨーロッパのテキスタイルのビエンナーレとトリエンナーレが同時期に開催される年にあたります。多摩美術大学の名誉教授のわたなべひろこ先生が企画された研修旅行に9月27日より参加いたしました。

初めに訪問したのはイタリアのコモで開催された Arte&Arte 展第29回 miniartextil Como です。古い教会を展覧会場に使用していました。コモは有名な避暑地ですがかつてコモプリントの生産が盛んな地でもあり、テキスタイルとの関係が歴史的にありました。

研修に参加された aaca 会員の岡本直枝氏が大きな作品を出品されていましたが、荘厳な雰囲気と作品がとても合っていて素晴らしかったです。ミニアチュールの部門には日本の参加者が5人いました。私は2014年に出品した際に会場外の垂れ幕と図録の表紙に作品を使用して頂きましたが、その時は訪れる事が出来ず今回はこの会場を楽しみにしていました。次にシルク博物館を見学しました。日本の機械とよく似ていると思いましたが、大掛かりで織り幅が広いです。日本から昔は生糸を輸入していたそうです。

スペインでは第8回 WORLD TEXTILE ART (WTA) ビエンナーレをマドリードの3箇所で見学しました。プロデュースしたマリアオルテガ氏が本会場とミニアチュールを、メキシコのジョセフィーナ・アヤナ・モラレス氏は屋外会場を、ブラジルのピラ・トモン氏はブラジルの作家達の作品を案内してくださいました。ブラジルでは展示されているテキスタイル作品を手で触って感触を感じて良いそうです。日本からの出品はミニアチュール部門のゴールドメダル受賞の脇坂真祈子氏、出居麻美氏、大きな作品にも3人おられました。

屋外作品の審査員にはギャラリーギャラリーの川嶋啓子氏が加わっていました。スペインの明るい太陽の下で見る作品はテ

キスタイルでありながら力強さを感じました。

オランダでは第6回ライスワイクテキスタイルビエンナーレを見ました。この特長は基本的に『テーマ無し』なのですがキュレイターのビクトリア氏は繊細で技術的に確かな自然とジェンダーと戦争をテーマにしたものを主に選んでいました。次にテキスタイル博物館・実験工房を見学、パウハウスとの深い繋がりの歴史がありました。

ポーランドでは第16回国際タペストリートリエンナーレ・ウッジに行きました。苦難の歴史を乗り越えて来たポーランドが小さな町のウッジで50年近く世界に向けてテキスタイルのトリエンナーレを発信し続けていることに感動しました。ゴールドメダルはポーランドとアメリカの作家、シルバーはフランス、ブロンズはリトアニアの作家でした。日本からも3人出品していました。キュレイターの考え方で展覧会の形はだいぶ違ってくる感じました。スペイン・ポーランドの展覧会ではテーマを重視し、現代アート的手段としてのテキスタイルを選出しているように思います。

その日の夕方から City Art Gallery でポーランドのタペストリーの伝統を引き継いでいる現代の作家の作品を鑑賞しました。素晴らしい技と造形だと思いました。引き続き夜にファイバーアート作家のシーガン氏の光ファイバーでタペストリーを制作している個展を拝見しました。

最終日はウッジ美術大学を学長の案内で見学、その教授で紙作家のエバ氏の個展を鑑賞しました。エバ氏は和紙のことをとてもよく研究なさっていました。シーガン氏の回顧展が最後の見学でしたが彼の初期の作品がとても素晴らしいと思いました。

今回の研修では現代アートと物作り、造形との関わり方を考えてしまいました。また、日本で世界に向けたコンペティションが出来ることを切に願っています。



コモ第一会場



脇坂真祈子作品



出居麻美作品



ライスワイク



City Art Gallery

法人会員の企業活動を訪ねて

株式会社 LIXIL を訪ねて

広報委員会

日本建築美術工芸協会が設立された1988（昭和63）年に入会された株式会社 INAX は、1924（大正13）年に伊奈製陶株式会社として設立され、1985（昭和60）年に株式会社 INAX に社名を変更されました。そして2011（平成23）年には、トステム株式会社、新日軽株式会社、サンウエーブ工業株式会社、東洋エクステリア株式会社の5社が統合され株式会社 LIXIL が誕生し、さらに2012（平成24）年には、40社に及ぶ会社からなる株式会社 LIXIL グループとなりました。このグループの最大事業会社である株式会社 LIXIL は、水まわり設備などのウォーターテクノロジー事業、ハウジングテクノロジー事業、ビルディングテクノロジー事業と幅広い事業を展開されています。その前身である伊奈製陶株式会社、株式会社 INAX 時代からの沿革と企業活動をご紹介します。

初代伊奈長三郎が1766（明和6）年、常滑で茶器の制作販売を始め、1880（明治13）年、伊奈初之丞が四代長三郎から家業を継ぎ、1902（明治35）年、土管の製造を開始し、1910（明治43）年には、モザイクタイルの生産を始めましたが、伊奈初之丞がモザイクタイルと命名したそうです。

そして、帝国ホテル旧本館（一部は博物館明治村に保存）の建設が転機となります。フランク・ロイド・ライトは、帝国ホテルの建設工事に際し、外壁や内装に使う大谷石採掘のために栃木県大谷町の石山を一つ買い取り、採掘のための会社東谷石材会社を設立させ、またスクラッチタイル、テラコッタを製造するために愛知県常滑市に帝国ホテル煉瓦製作所を設立しましたが、この時、技術顧問として伊奈初之丞、伊奈長三郎の親子が製造にかかりました。そして、帝国ホテルの煉瓦製造が終了すると、伊奈長三郎は初之丞の土管工場を母体に、1921（大正10）年5月1日、匿名組合・伊奈製陶所を立ち上げ、1924（大正13）年2月1日、伊奈製陶株式会社を設立し、タイル、土管、テラコッタの製造を始めました。そして、1937（昭和12）年6月、全長100メートルのトンネル窯の完成により半磁器タイルの製造が始まり、1945（昭和20）年には衛生陶器の製造が開始され、

1958（昭和33）年には、ポリバスが、1967（昭和42）年には、国産初のシャワートイレが発売されました。

1985（昭和60）年、事業の拡大や多角化に伴い株式会社 INAX に社名変更され、その翌年常滑に歴史資料館「窯のある広場・資料館」がオープンしました。資料館オープンの4年前、1981（昭和56）年には、東京・京橋にショールームが開設され、ショールーム内に設けられたギャラリーで建築やデザイン、美術をテーマにした企画展やセミナーを継続的に開催するようになり、本格的に文化活動が開始されました。

LIXILギャラリー

LIXIL ギャラリーは、「一番いい場所に文化の場を」という想いで1981（昭和56）年、銀座ショールーム（東京・京橋）内に開設したのが始まりで、現在は3つのギャラリーで「建築とデザインとその周辺をめぐる巡回企画展」と、「建築・美術展」および「やきもの展」を定期開催しています。

「建築とデザインとその周辺をめぐる巡回企画展」は、年間4本の企画展が開催され、東京と大阪（梅田）のギャラリーで巡回展示されています。これらの展示に合わせてLIXIL BOOKLET が編集されて、LIXIL 出版より発行されています。東京では2月22日まで「ものいう仕口－白山麓で集めた民家のかげら」展が開催されています。「建築・美術展」は、2014年9月より「クリエーションの未来展」と題して、日本の建築・美術界を牽引する4人のクリエイター、清水敏男（アートディレクター）、宮田亮平（金工家）、伊東豊雄（建築家）、隈研吾（建築家）を監修者に迎え、独自のテーマで現在進行形の考えを具現化する展覧会を開催しています。1月27日からは「九つの音色－Reflection」展が3月24日まで開催されています。「やきもの展」は、2014年9月より「生活とアート」をコンセプトに、美術評論家で日本陶磁協会常任理事森孝一氏をアドバイザーに迎え、新しい切り口のやきもの展覧会が開かれ、1月23日から「伊勢崎晃一朗」展が開催されています。



窯のある広場・資料館



建築陶器のはじまり館



テラコッタパーク

1986（昭和 61）年には、建築文化に関わる書籍を発行する出版事業（現・LIXIL 出版）が開始され、建築や住文化をテーマに、都市、建築、デザイン、生活文化を新しい視点でとらえ直す書籍を発行しています。年 4 回発行している「LIXIL BOOKLET」のほか、若手建築家の建築思想から建築の方途を探る「現代建築家コンセプト・シリーズ」をはじめ、建築家の作品集や評論集などが刊行されています。1991（平成 3）年には、ギャラリーでの展覧会開催や出版活動が評価され「第 1 回メセナ大賞（現・メセナアワード）・特別賞」を受賞されました。

INAX ライブミュージアム

日本六古窯の一つで INAX 創業の地でもある愛知県常滑市で展開している INAX ライブミュージアムでは、1986（昭和 61）年に煉瓦造りの大煙突と窯を内包する建物を整備して「窯のある広場・資料館」を開設、1997（平成 9）年には世界の装飾タイルを日本で唯一展示する「世界のタイル博物館」を、1999（平成 11）年にはタイルアート体験などが楽しめる「陶楽工房」が開設されました。2006（平成 18）年には、土の魅力を発見・体感できる「土・どろんこ館」と、伝統を継承し魅力的で革新的なものづくりに挑戦する「ものづくり工房」を加え、「INAX ライブミュージアム」としてグランドオープンしました。さらに 2012（平成 24）年、芸術性の高いテラコッタを展示した「建築陶器のはじまり館」を新設し、土とやきものの魅力やものづくりの心を伝える博物館として活動を展開されています。

「窯のある広場・資料館」は、1921（大正 10）年から 1971（昭和 46）年まで土管を製造してきた窯を保存・展示し、1997（平成 9）登録有形文化財に指定されましたが、耐震改修され、2019 年の 10 月 5 日にリニューアルオープンしました。煉瓦づくりの窯のなかでは、プロジェクションマッピングにより、窯焚き作業の様子が分かりやすく紹介され、資料館には、当時の土管や土管づくりに用いた道具や機械類が展示

されています。「世界のタイル博物館」では、世界の装飾タイル約 1000 点が展示され、珍しい、貴重な品々に触れることができます。「建築陶器のはじまり館」では、伊奈製陶設立時代からの歴史や日本を代表する芸術性の高いテラコッタが展示され、特に展示室中央に置かれた帝国ホテル旧本館ダイニングルームの大谷石とタイルの柱は存在感があります。また屋外には、横浜松坂屋本館（2010 年解体）の収蔵をきっかけに、ビルの外壁を飾っていた大きなテラコッタを当時のように垂直な壁面で、太陽の光のもとで見ることができる「テラコッタパーク」を 2012 年にオープンし、横浜松坂屋本館を始め、朝日生命館（旧常盤生命館、1980 年解体）や自治省庁舎（旧内務省、2001 年解体）などの外壁が一部保存・展示されています。

INAX ライブミュージアムでは、触れて、感じて、学び、創りだす、体験・体感型ミュージアムを展開され、「土・どろんこ館」では、子供たちに大変人気のある“光るどろんどろんごづくり”などの体験教室やワークショップが開催され、「陶楽工房」では、モザイクアートやタイル絵付けなどの体験教室が開催され、家族連れや子供たちで賑わっています。

長年にわたる「世界のタイル博物館」、「INAX ギャラリー」などの活動に対して 2001 年、「第 11 回メセナ大賞（現・メセナアワード）・企業文化賞」を受賞されました。また、2013 年には「INAX ライブミュージアム」がテラコッタの継続的な収集・保存・公開等の活動に対して日本建築学会賞（業績）や西洋美術振興財団文化振興賞を受賞されるなど数多くの賞を受賞されています。

INAX ライブミュージアムは、名鉄名古屋駅から特急電車で常滑駅まで約 30 分、中部国際空港からも車で約 10 分と近く、一日学び楽しめるミュージアムで、レストラン「ピッツェリア ラ・フォルナーチェ」では、薪窯で焼くピッツアなど知多半島の恵みも味わうことができる、お勧めの「美味しいミュージアム」です。

（飯田郷介・松本治子）



LIXIL 出版による出版物



LIXIL ギャラリー「仕口展」©白石ちえこ



LIXIL ギャラリー © 南野馨

「地域風土に根ざした文化芸術活動」分科会報告 (topics 編)

建築家
調査研究委員会
日本建築美術工芸協会会員
七字祐介



◆東日本大震災に因んで被災地への訪問から

東日本大震災に見舞われた年にスタートした「地域風土に根ざした文化芸術活動」分科会は本年3月、「宇都宮一次の街づくりのメソッド」と銘打って講演会を行い、節目（前号に報告）を迎えたが、本記事は分科会発足からこの間の活動の TOPICS である。

2011年7月、震災発生から4か月、一週間後に「野馬追い祭り」を控えた福島県相馬から南相馬を訪ねた。松川浦から南相馬へ向かう沿道の風景は凄惨を極めた。1000年有余絶やすことの無かった「野馬追い祭り」は騎乗者と騎馬の多くを失い開催が危ぶまれたが張り詰める空気の中、中村神社一社で挙行された（2011年「中間活動報告」）。

2012年5月、震災後1年2か月、情報文化委員会主催、「3.11以降～東北の文化を考える～」ツアーに参加。福島県田村市から中通りを福島第一原発事故後の現状を近くに視て、浜通り、いわき市久ノ浜へ。まちづくりサポートチーム代表の在京の建築家、栗田祥弘氏がいち早く地元の子供達とのワークショップを立ち上げ活動されている姿に低頭した。田村市の「お人形さんの衣替え」は宮本常一著「忘れられた日本」が目目の当たりに復刻される幻影に陥った。この被災の時期に「結」の皆さんが4m程の人形の杉葉の衣替えに粛々と勤むのである。（情報文化委員会、2013年「3.11以降～東北の文化を考える～」記事寄稿）、2012年8月、仙台在住の建築家、氏家清一氏のご尽力で、宮城県沿海地域（荒浜～東松原～野蒜～石巻～女川～雄勝～南三陸～亘理～閑上）を縦走、復興に取り組む現状を視察した。スーパー堤防の是非を巡って各地で紛糾する現況を目の当たりにする。閑上地区の簡易なプレハブ小屋に設えられた「閑上まちカフェ」で建築家・柳沢陽子氏と若いスタッフが復興後の構想を精力的にスケッチされている姿に感銘を受けた。

◆千葉県いすみ市大多喜町との関わり（2012年～2018年）

2012年9月、元・調研委員、佐藤建吉氏が千葉県いすみ市周辺5市（いすみ、市原、大原、一ノ宮、茂原の各市）に働きかけ、いすみ市大多喜町で「房総横断鉄道沿線地域におけるエコミュージアムの可能性」と題して、エコミュージアム研究の第一人者である横浜国大、大原一興教授を招いてシンポジウムが開催された。エコミュージアムとは1960年代にフランス人、アンリ・リヴィエールによって提唱され、地域の自然遺産、歴史・文化遺産を丸抱えで博物館とするものである。横断鉄道とは外房・大原からいすみ鉄道、内房・五井から鉄道が大多喜町で結節する。そして外房、内房からの歴史風土が混淆し多彩な文化遺産を残してきた。一例は、行元寺欄間が外房・鴨川の彫り師「波の伊八」作であるが、北斎の「富嶽三十六景／神奈川沖浪裏」はこの欄間に彫られた波を写したものであると言われる。前述したシンポジウムに委員の多数がアートワークのプレゼンに参加したのを機会に大多喜町との関係を深めていった。大多喜町は小江戸と言われる落ち着いた城下町である。町の中央に今井兼二氏設計の町役場（国・登録有形文化財指定）が凛としてある。今井兼次氏が逗留した「長島旅館」（寝食された居室も保存）は城下町にあって古き良き佇まいを残している。2014年、大多喜町立旧老川小学校廃校活用応募に調研有志が当選し、大多喜町のみならず周辺地域と連携し、地域再生へ繋げるプログラムやイベントを展開したが、行政の事業枠組みに従う不自由さに3年で撤退を余儀なくせられた。この間、調査研究委員は大多喜町を訪問し分科会テーマに臨んだが、旧老川小学校からの撤退を機会に潰えた。エコミュージアム構想は長生郡陸沢町立「歴史民俗資料館」館長である久野一郎氏を中心に活動中であるが、あらためて内容を整理し詳述する機会を願っている。



相馬馬追い祭りの準備に緊張が走る



エコミュージアムシンポで電気自動車と調研委員



行元寺欄間（伊八）と神奈川沖浪裏（北斎）



大多喜町・旧老川小学校

第1回 aaca サロンの開催報告

建築家
会員増強委員会委員長
日本建築美術工芸協会会員
芝山哲也



会員増強委員会では、当協会の活動をより強化し建築や芸術に関わる人々への更なる貢献を目指すべく、会員の皆様のご協力のもと新規会員の勧誘活動を実施しています。去る、9月30日に新規会員の方を中心とした交流の場として「aaca サロン」を開催しました。特にアーティストやデザイナー系の新会員の方々に発表・交流の場を提供することで、入会の動機づけになればとの考えです。また、作家の活動や作品の紹介を通して、会員同士の交流だけでなく、創作活動への刺激が得られ、更にビジネスチャンスを提供できるようなイベントになることも開催目的のひとつとなっています。

場所は建築会館1階のギャラリーにて開催しました。今回は、丘の上事務所代表の酒匂克之氏、都市環境照明研究所長の武石正宣氏、氏デザイン株式会社代表の前田豊氏の3名の方が登壇し、佐藤総合計画の渡辺猛氏がコーディネーター役を務めました。テーマは、「『湾型ライブラリー』を創る“境界なき協働”のありかた」と題し、渡辺氏が建築設計を担当した長崎県立+大村市立一体型図書館『ミライ on』における計画・デザインについて語り合いました。このプロジェクトにおいて、酒匂氏はインテリア（家具）デザイン、武石氏は照明デザイン、前田氏はサインデザインを担っており、その協働プロセスを主な題材として活発な議論が繰り広げられました。

最初に建物の概要が説明され、その後3氏がそれぞれご自分の考え方を他の作品事例も交えてプレゼンテーションし、聴講者の皆さんの質疑に答えるかたちで会が進められました。ディスカッションの一部を紹介すると、酒匂氏からは建築設計者のコンセプトに家具やインテリアという領域でどう応えていくか、今回の施設では書架という図書館で最も重要な家具を中心に、ゾーニングや動線にストーリー

性を持たせることが重要だったという説明がありました。武石氏からは、その書架の上部に照明器具を配して天井を柔らかく照らし上げる手法を取ったことと、大きな空間の中で天井照明を設けない計画の合理性が語られ、最後に前田氏からは、図書館は親しみやすさが重要であり、そのデザインモチーフを長崎の街のあちこちにあるアーチ形の造形から拾い上げたという説明がありました。また、サインと照明計画の絶妙な相乗効果も議論の題材となりました。

会場からは、サインのデザインモチーフの考え方について賛否両論の意見が交わされたり、3者のコミュニケーションプロセスについての質疑などもありました。それに対して、家具・照明・サインデザインそれぞれにおいて、業務フェーズや各デザイナーがプロジェクトに関わる時期にもズレがあり、全員で議論を深める時間が限られていたことなど、“境界なき協働”を実現する難しさについても議論されていました。

今回のサロンは40名近い参加者となり、最後に岡本会長からも興味深い会であったとのご感想と、継続のご要望をいただきました。会員増強委員会としては、このサロンが参加者全員で活発な議論ができる場となることを目指し、更に改善も加えて次回以降を企画していきたいと考えています。会員の皆様もご自身のお知り合いのアーティストの方には是非お声掛けいただき、このようなサロンの場をご提供されては如何でしょうか？

既会員の方も、新会員の方と協働された作品や活動を題材にご登壇ください。「aaca サロン」を会員の皆様の積極的な交流の場として活用していただくと同時に、会員増強活動にも寄与していただくことができると考えております。皆様の活発なご参加をお待ちしております。



第1回 aaca サロン



約40名の参加者があった



長崎県立+大村市立一体型図書館「ミライ on」

金沢・福井・滋賀地区建物視察会に参加して

建築家

株式会社日本設計 PM・CM 部 シニアマネージャー

日本建築美術工芸協会法人会員

山下博満



今回も、aacaの視察会ならではの貴重な体験ができました。

11月15日金曜日、前泊明けの朝は雨も上がり、富山市庁舎の元気な様子を確認して、金沢駅の集合場所へ。

①金沢建築館

谷口吉生さんの最新作。2階には谷口吉郎の和室を再現し、地下の展示室では開館記念特別展が開催中でした。館の方から「谷口吉郎は、この地に住んで古い建築を活かしたまちづくりを提案し実践した。」「谷口吉生は、この地に父の設計による内部空間と融合した新たな建築館を構想し実現した。」ことを聞き感銘を受けました。展示の中で、私の家の傍に建っていた煙突のある白い建築が、学生交流のための風呂場（谷口吉郎）であったことを初めて知りました。2階のロビーでは、山種美術館やホテルオークラで見慣れた行灯に再会することもできました。

②NICCA イノベーションセンター

昨年 JIA の表彰式に（霞が関ビルで）出席した際にお話を伺った日華化学の方や設計者小堀哲夫さんのプレゼンテーションがオープンなホールで行われ、日華さんの「働き方の意識改革」に始まったプロジェクトが、KDKH モデルを元にした小堀さんの「四輪駆動」で加速され、さらにこの場で新たな「0 から 1 を創出する」活動が生まれていることを知り、意識から会社を変えようという意欲に多くを学びました。

近年、屋外で仕事をするのが気に入っています。空の変化、風の変り目、鳥や虫の声、…、そういう中において仕事もはかどります。NICCA にも、前回視察会の ROKI のような不均質性、曖昧さ、揺らぎが溢れていて、皆さん仕事がかどるに違いありません。

宿泊先近くの「敦賀市交流施設オルパーク」（千葉学）は、交流会後の夜も次の朝も人々に使いこなされていました。



金沢建築館の行灯



NICCA の四輪駆動

③福井年縞博物館

小高い丘からブルータルなシャフトが空へ立ち上がる縄文博物館（横内敏人）の向かいに、互いの良さを競い合うような横に伸びる端正な切妻屋根がふっと浮いています。内藤廣さんによるこの佇まいと執拗な縞々デザインの理由が、館の方からの年縞の説明で腑に落ちました。

運営者も建築家も「水月湖年縞」の本質を如何に伝えるか、に心を砕かれています。世界にここしかない地形地質の奇跡的な好条件、7万年前からの気候変動や地球環境の詳細な履歴、10cm に満たない径の棒から地球全体の歴史を読み解くドラマ…年縞そのものの存在感に圧倒されました。

④佐川美術館・樂吉左衛門館

ここを訪れるのは4回目、茶室は2回目でしたが、樂吉左衛門館を樂さんとともに設計された内海慎介さんのお人柄に触れ、ますます好きになりました。

今回内海さんがこだわられたのは、11時半に観始めること。40名を載せたバスはピッタリに到着し、4班に分かれて茶室を見学。待ち時間のうち、「白隠と仙厓展」以外はずっと、樂吉左衛門館のホールに居ました。11時半過ぎから射し込みはじめた光は、息を凝らして見つめる正面の壁を、水の揺らぎを映しながら滑り落ち、時とともに角度を変えていきます。集合時刻直前、光がスッと消えて深い静寂に包まれました。

アプローチにも贅と工夫を尽くした茶室ではゆっくりしたかったというのが正直なところですが、次は家族で訪れます。

⑤ラ・コリーナ近江八幡

「ふくみ天平」は大好物です。雑誌で見っていた草屋根は分厚く育ち季節の色を纏っていました。藤森照信さんと協働された中谷弘志さんにご案内いただき、刈入れ後の田んぼを歩いたり、秋祭りの松明づくりを眺めたり、他設計者の配置案を見たり、クリの柱を撫でたりして、ここの世界観をだいたい理解できた気がします。カフェで楽しんだ「焼きたて八幡カステラ」と粒餡のマリアージュは忘れられません。

全体を通して晴天続きで、すばらしい視察会でした。



福井年縞の展示



樂吉左衛門館のホール

葦賞

iraka

原字書/岡本光平

第18回 瓦屋根設計コンクール・第5回 葦賞学生アイデアコンペティション

■募集期間(募集要項に沿ってご応募ください)

令和2年2月1日～5月10日(5月10日消印有効)

- 募集要項・応募用紙は下記ホームページからもダウンロードできます。
葦賞事務局(愛知県陶器瓦工業組合) <http://www.kawara.gr.jp/>
全国陶器瓦工業組合連合会 <http://www.zentouren.or.jp/>

■審査委員(敬称略)

富永祥子(建築家 福島加津也+富永祥子建築設計事務所副代表 工学院大学教授)
近角真一(建築家 集工舎建築都市デザイン研究所代表 東京建築士会会長)
原田真宏(建築家 MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO主宰 芝浦工業大学教授) 他6名

設計部門

■課題

国内産粘土瓦を屋根又はその他の部位に使用した建築設計や環境デザインの優れた実施例で、応募時点において完成後1年以上(7年以内まで)経過している建築物及び構造物で、「住宅」「一般」の部門別に審査します。

- 住宅部門(一戸建、併用住宅、集合住宅等)
 - 一般部門(住宅以外の建物全般。また屋根以外に使用した建造物も含む。)
- 建物の様式、大小、瓦の産地、形状等は制約いたしません。
すでに発表されている作品でも結構ですが、過去の葦賞に応募されました作品の再応募は出来ません。

■賞

- | | |
|------------|---------------|
| ●金賞(2点) | 賞状および・副賞 50万円 |
| ●銀賞(1点) | 賞状および・副賞 20万円 |
| ●銅賞(1点) | 賞状および・副賞 10万円 |
| ●景観賞(1点) | 賞状および・副賞 10万円 |
| ●佳作(10点程度) | 賞状および・副賞 3万円 |

■募集要項のご請求・応募作品提出先

葦賞事務局

〒444-1323 愛知県高浜市田戸町一丁目1番地1
全国陶器瓦工業組合連合会 高浜事務所内
[TEL]0566-52-1200[FAX]0566-52-1203
[E-mail]info@kawara.gr.jp

学生部門

■課題「新しい瓦が生み出す未来の日本」

この国の風土の中で培われてきた瓦。
これからの私たちの暮らしをより豊かにする「新たな瓦」が考えられないでしょうか。新しい瓦が生み出す、豊かな暮らしとその風景を考えてみてください。

■応募資格

国内外の大学院、大学、高等専門学校又は各種専門学校で学んでいる学生。
グループによる応募も可。

■賞

- | | |
|-----------|---------------|
| ●金賞(1点) | 賞状および・副賞 10万円 |
| ●銀賞(1点) | 賞状および・副賞 5万円 |
| ●銅賞(1点) | 賞状および・副賞 3万円 |
| ●佳作(5点程度) | 賞状および・副賞 1万円 |

主催 / 全国陶器瓦工業組合連合会、一般社団法人 全日本瓦工事業連盟

後援 / 経済産業省、国土交通省、一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本建築家協会、公益社団法人日本建築士会連合会、
一般社団法人日本建築士事務所協会連合会、一般社団法人日本建築美術工芸協会、全国いぶし瓦組合連合会、株式会社日本屋根経済新聞社

事務局だより

■新入会員・会員の異動 2019年10月～2019年12月(敬称略)

個人情報保護法により、個人会員は氏名・活動分野、法人会員は会社名・所属部署・代表者氏名・担当者氏名・会社住所・電話のみを掲載いたします。

《新入会員》

個人 会員	すずき あき(工芸家)、上村伴子(美術家)、三原 等(版画家)、 垣田博之(AACA優秀賞)、堀越ふみ江(AACA優秀賞)、 三井 嶺(AACA奨励賞)、末光弘和(芦原義信賞)、
----------	---

《会員の異動》

個人 会員	名前変更	楽 直入(新)	楽 吉左衛門(前)
----------	------	---------	-----------

広報委員会だより

●私は、11月15日、16日に開催されました「第14回建物視察会」に初めて参加しました。この建物視察会は、aacaならではの好企画で、本会報「会員交流委員会だより」のページで山下博満氏が全体の報告をされていますが、私の心に残った建物は佐川美術館の楽焼15代楽吉左工門氏設計の「茶室」と藤森照信氏ワールドとも云うべき「ラ・コリーナ近江八幡」(写真)でした。

楽氏が設計された茶室は水庭の地下にありました。僅かな光の中で水底に居るような静寂に包まれながら路地を進むと、長い庇の竹と池の葦が目線に広がる広間に出ます。特にその池に接した黒く濡れた石畳みの造形美にゾクゾクさせられ、茶室全てにゆきわたる研ぎ澄まされた美意識に敬服しました。

一方、「ラ・コリーナ近江八幡」は草木に覆われた大屋根と窓から伸びる木々に思わずにっこり。そして特別に案内された塔の上からの眺めは、点在している建物が周囲の山や丘に溶けこみ、来訪者の動線も加わり地上絵になっていました。この地下空間と地上絵に改めて五感を刺激させられた視察で、とても感謝している次第です。来年の建物視察会も今から楽しみです。

(山崎輝子)



●広報委員会では、建築会館内にある協会事務所で委員会の定例会議を毎月開催しています。定例会議では、広報委員会活動や会報の企画・編集などについて協議・意見交換が行われます。そして、会議後は楽しい交流会があります。先日の会議後は、夕刻の田町駅西口からコンコースを歩き、駅改札口へ向かう多くの人びとの人波とは逆の方向にある東口へ出ました。そして、駅直結の2018年に誕生したばかりの複合施設『ムスブ田町 (msb Tamachi)』を訪れましたが、委員会ではテナントのお店を一つ一つ巡る企画を有志で楽しんでいます。私は初めて3回目のお店スパニッシュバルに参加しました。おりしもローマ教皇が来日されスペイン語でお話しされているニュースを耳にしたばかり、スペインやイタリアの話題で盛り上がりました。広報委員会は「美味しい委員会」とも言われ、美味しく、楽しい委員会ですので、広報委員会へのご参加をお待ちしています。

(野口真理)



編集後記

新年あけましておめでとうございます。昨年は改元に伴う様々な行事が催されるなど話題が尽きない一年でしたが、今年も東京、札幌などでオリンピックが開催されるなど楽しみな一年になりそうです。

協会でも今年も皆様に楽しんでいただけるような様々な事業が開催されると思います。会報も表紙が84号(夏号)から「街に飛び出す作品展」の推薦作品で構成し、86号(新年号)では「第3回街に飛び出す作品展」の推薦作品となった会員の皆様の作品が表紙を飾っています。今年にはさらにより多くの個人会員の皆様に登場いただける誌面、また、より多くの法人会員の皆様の会社の活動などをご紹介できるような誌面づくりに努めてまいりますので、本年もよろしくお願いいたします。

(飯田郷介)

aaca 2020.1 no.86

発行人 会長 岡本 賢
 発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
 〒108-0014
 東京都港区芝5-26-20 建築会館6階
 TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
 URL <http://www.aacajp.com>
 E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
 委員長 飯田郷介
 会報担当副委員長 野口真理
 会報編集委員 五十嵐通代 石田真人 置鮎早智枝
 竹生田 正 田島一宏 中村弘子
 松本治子 三上紀子 山崎和子
 山崎輝子 山下治子 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション